

栄光

説教

『共に生きる』

創世記18章9節～15節
ペトロの手紙一3・1～7

岸 俊彦

説教・「共に生きる」岸牧師……1
特集・
潤いを与える……2
転会おめでとう!
菊地信行神学生…5
追悼・
岡田和貴兄……5
説教・
「見えるのは誰?」
狩野伝道師……6
伝道師の書き込み…7
牧師の書斎から…7
長老のファイル…8

教会とそれに連なるキリスト者は、世の旅人であり、寄留者です。御言葉に照らしながら異教社会の中で、キリスト者としてどう

生きるかは日々の課題です。キリスト者である妻は、そうではない夫にどう振る舞ったらよいのでしょうか。その反対もあります。

私たちの願いは、キリスト者ではない夫、また妻がキリスト者となることです。命の恵みを共に受け継ぐ者となつてほしいのです。

何のために夫婦になったのでしょうか。互いに助け合うためです。主の恵みを分かちあい、隣人とも分かちあい、主の栄光を現すためです。私たちは一人では生きていきません。様々な困難のある人生と世の中を、共に助け合つてこそ生きることができます。口先だけ

で「共に生きる」と言つても、人は動きません。もつとも身近な夫婦なら、一番よく分かるでしょう。

夫はキリスト者である妻をよく観察しています。夫は妻のことが気にかかります。「御言葉を信じてない夫」だからこそ「御言葉を信じる妻」の行動が気になります。教会でどんなことをしているのか、どんな人と活動しているのか。たとえ表に出さなくとも、夫は妻のことに大に関心があります。

妻が夫が救われるように主に願うのは、夫を愛するからです。その願いが実現するためにはどうしたらよいのでしょうか。

「妻の無言の行い」があればよいのです。「神を畏れる純真な生活」を、夫によくよく見てもらえばよいのです。夫の場合も同じで

す。子どもにも親の無言の行いをみてもらえばよいのです。隣人に對しても同じでしょう。

ペトロの言葉は、聞きようによつては言葉より行いだと、とれなくもありません。しかし、そうではありません。「神を畏れる純真な生活」はどうして生まれるのでしょうか。日々御言葉に聞き従い、御言葉に照らして悔い改め、赦され、新たにされることを繰り返して、またそのことを積み重ねて、「神を畏れる純真な生活」は形作られます。キリスト者としての習慣が「神を畏れる純真な生活」を生み出すのです。信じて生きる私たちの日々の平凡な一つひとつの行いが無言の行為となるのです。

無言の行いとは自分自身が心から信じて生きることです。余計なことは言わない。指図しない。教えようとしない。御言葉を振り回さないことです（竹森満佐一）。自分自身が礼拝生活を重んじ、御言葉に聞き従うことです。日々祈ることです。主の御前に謙虚に生きることです。キリスト者として当たり前のことを当たり前に、日々たゆまず、諦めず、倦まず繰

り返すことです。

「妻を自分よりも弱い者だとわきまえて」（7節）とペトロは語っています。「わきまえて」とは「知性をもつて」ということです。妻を知ることです。妻を理解することです。「同じように」妻も夫を知ることです。夫を理解することです。そして、忘れてはならないことは神を知ることです。キリストを知ることです。主を信じることです。

自分の力では人の心を動かすことはできません。しかし、主が愛する人の心を動かしてくださいと信じるのです。主が動かしてくださいようにと祈るのです。私のような者の心を主が動かしてくださいました。主の奇跡を、私たちは自分自身に見ることができません。私のために、主こそが徹底して柔和な方となつてくださいました。私のためにキリストは、御心に従つて十字架にご自身を丸ごと投げ出してくださいました。

互いに祈り合い、仕え合い、キリストに慰められ、励まされ、聖霊に導かれて、共に生きて行きましょう。

潤いを与える

肌は潤いがなくなると

カサカサになりますが、心も同じこと。

行動が制限されたり、我慢することが多くなると

気持ちもだんだん「カサカサ」から「トゲトゲ」になりがちです。

深呼吸をしてみたり、ゆっくりお湯に浸かったり、

好きな本を読んだり、ビデオを鑑賞したり…。

気持ちが豊かになると、内側から乾きも癒やされます。

でも一番効くのは、やはり毎週の礼拝の御言葉でしょうか。

心の潤い

稲葉陽二

歳をとると身長が縮みます。ネットですと調べると、40歳以降は10年間平均で身長が1センチ縮むと書いてありました。私も67歳の時、旅先で転倒し、体のバランスを崩し、そのあとから身長が縮み始めました。身体から潤いが抜けて弱気になり、文字通り人間としての器が小さくなります。

私は30年サラリーマン勤めをした後、53歳から学者になったのですが、フィールドワークの場として、北信濃の須坂市に大変お世話になっていました。その隣町の小布施町には葛飾北斎が訪問し、作品をいくつか残しているのですが、なかなか見る機会がありませんでした。

ようやく3年前に初めて小布施でゆっくりと北斎の作品を見る機会を得ました。私は芸術とは余り縁のない人間ですが、構図の大きさ、力強い筆致、色使いの鮮やか

さに圧倒されました。そして、それらが北斎の最晩年の作品であることを知りさらに驚きました。しかも、80代半ば〜89歳まで4回も江戸からはるばる小布施まで旅して制作した作品であることを知り、80代後半の年寄りが車も鉄道もない時代に一体どうやって頻繁に来ることができたのかと北斎の熱意にうたれました。彼の作品に何重にも圧倒されたのですが、最後に、彼の卒寿（90歳）での辞世の言葉「天我をして5年の命を保たしめば真正の画工となるを得べし」と言ってもって亡くなったと記されているのを読み、当時早々と引退後の生活を考えていた自分が限りなく恥ずかしく思えました。

辞世の言葉を発した90歳の北斎の身体はおそらく、縮みに縮んでいたのではないかと私はふと思いました。でも、そんな身体からこのような力強い言葉が発せられる。歳をとると人は縮むが、心は無限に膨らますことができる。身体は物理的には潤いを失うが、心はより潤いを増すことができる。この北斎の言葉は、転倒して弱気になっていた私には胸に響きました。

命に至る水

久保田あけみ

約20年前から日本とイランを行ったり来たりの生活をしております。イランでの夫の用事もだいたい済み、日本で落ち着いた生活ができるようになってきました。1週間に1度のヨガ教室、ジム通いと、なんとかリズムが取れた日常生活になってきたところに、コロナ感染の問題ですべての活動がストップしてしまいました。

こちらに引越してきて4年が経ちましたが、近所の人と交流が全くありませんでした。このコロナ禍で、去年の夏から自治会で高齢者のために毎朝ラジオ体操を始めることとなり、それに参加するようになりました。お陰様で何階の何々さん、と名前も覚え、外で会っても話ができるようになってきました。幸いこは自然に恵まれており、川辺を散歩しながら小鳥のさえずり、野の花を眺めて「明日のことまで思い悩むな。明日の

ことは明日自らが思い悩む」マタイによる福音書6章の言葉が浮かび、肩の力が抜け、安心感に包まれました。また、時々ヨガ教室で習った呼吸法を実践し、リラックスするように心がけています。

何よりもみ言葉によって支えられていることは幸いなことです。

「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(ヨハネによる福音書4章14節)。

日曜日に教会へ行くことができなくなりましたが、ライブ配信で礼拝を守ることができ、本当に感謝しています。日曜日の朝パソコンの前に座り、前奏が始まると、後ろから夫が「イエス・キリストにヨロシク」と声をかけてきます。はやく一緒に礼拝できますようにと祈り、礼拝が始まります。ライブ配信を観ている人の人数が表示されますので、ライブ配信で共に礼拝しているのだと思いが、終了後は皆さんがこちらに向かつて手を振ってくださるので、こちらからも手を振っています。

潤いを与える

河野滋由

「潤いを与える」とは、能動的表現ながら、知覚は受け身である。冬になると湿度が下がり、空気が乾燥することから部屋に加湿器を入れる。肌が乾燥することから保湿クリームを塗る。これらにより肌に潤いを与えられる。

また人間関係の社会では、他人の不満を聞いてあげたり心温まる言葉をかけられる存在は、人間関係間の潤滑油的存在に感じられる。潤いを感じるのは、自らよりも他人や他物から得られる場合が多い。

そこで、能動的に自らに潤いを作り出すということができないかと考えることがある。例えば「医食同源」という言葉があるが、食事により自らの肌や体に潤いを作り出す。あるいは、自分自身の考え方一つで自分に潤いを与えてくれるというもの。

その意味では、ラテン享樂的な

思想が底流にあり、全てを神様のせいにすれば許してもらええるキリスト教はありがたい。私は約20年前の40歳代前半で大病を患った。家族や親族は大変心配してくれたと思う。私は「神様が授けた休息の時間」と割り切り、焦ることなく病を完治し、社会復帰した。自分自身に心の潤いを与えたつもりであった。

でも、1人でよく考えた時「生かされている」とわかった。60歳を越えて、ここもとはあまりストレスを感じなくなった。人間が枯れてきたのかもしれない。単に鈍感になったのかもしれない。でも「神様は超えられない試練を与えない」の何件かの実体験を経て、つまらない不安や焦燥に駆られなくなったこともある。

要するに、毎週日曜日に教会で聖書を読み、讃美歌を歌い、心に潤いを与えられているのである。こは、やはり受け身でよいのだ。この生活を続けていきたい。

潤い

鈴木こづえ

この1年間、世界中の人々が新型コロナウィルスの脅威の中で過ごしてきました。今もそれは続いていきます。会いたい人にも会えず、行きたいところへも行かれず、必要最小限の行動しかできない我慢の生活を過ごしています。制限のある生活の中で改めて「潤い」はあるか、感じているかを考えてみましょう。ということ、このテーマが取り上げられたのだとは思いました。「潤い」とはどういうことなのでしょう。

言葉の意味を知りたくて辞書を引いてみました。「潤う」とは、「余裕が出る、豊かになる、恵まれる、慰められる」とありました。私の日々の生活の中でこのような「潤い」をもたらしてくれるのはどんなもの・ことなのでしょう。私の生活は日々平々凡々と過ぎていきます。以前より外出が少なくなったり、在宅勤務の娘たちや定年後、

自宅で過ごしている夫のためにほぼ毎日3度の食事の支度があつたり、日中独りで気ままに過ごすことが少なくなりました。大人になった娘たちとの会話は楽しく、それは生活に「潤い」を与えてくれています。

コロナ禍にあつても日々穏やかに過ごしているように見えますが、世の中の景気が悪くなつて経済的に苦しくなつたらどうしよう、家族・自分の健康が損なわれたらどうしよう、などと、起きてもない変化を恐れている心配性の人間です。66歳の今までを振り返ってみますと、生活の上での変化はいろいろありました。そして何とか変化を受け入れて今日まで過ごしてくることが出来ました。変化を恐れながらも受け入れられたのは神様の支えがあつたからです。恐れの中でも安心を与えられて過ごすことができたのです。これからも周りに影響されて心騒ぐとき、その不安な思いを析るとき、神様が「潤い」を与えてくださると思います。そのことを信じる心を神様が言葉で育ててくださると思います。

「潤い」と聞ける…音楽話

内藤慎也

長年音楽を生業としてきたが、音楽の世界にも「潤い」的なものはある。(言い方としての、金銭的に「潤う」…というのもあるが、そつちはおいといて(笑))

例えば「潤いのある歌声」と誰かが感じたとなると、それは多くの場合、ちよつと湿っている質感。業界的には「ウエット」と表現することもあるが、湿った声質は瑞々しい感じにもなりやすく、評価されやすいかもしれない。また、昔よくやつたCMの仕事では、食品系などである種「潤い」的なものが要求された。業界用語でそれを「シズル」と言うが、瑞々しい感じというか「おいしそう」と購買意欲を刺激する感じで…。まさに「潤いを与える」作業なのだが、これが表現するのが結構難しく、苦労した記憶がある。

さて、このように音楽の場合でも、水分を含んだ感じの「潤い」

的なものはプラスになる場合が多いが、一方、逆の「乾いた」感じも決して悪いわけではない。こちらは「ドライ」とか表現したりするが、あまりジメツとせず、カラツとした感じというか。

ウエットとかドライとか、イメージしにくいかもしれないが、わかりやすい例で言えば、ボーカルにエコーが深くかかっているとウエットで、エコーがない感じがドライ。同様に、サウンド全体としても両傾向があり、まあ好みも分かれるところだが、その曲々で使い分けている音楽家も多い。

ならば、潤い的なものをウエツト系の曲では感じてドライ系では感じないかと言えば、そうとも言い切れない。音はドライ系でも心情的に潤う曲もある。まあ感性次第と言つてしまえばそれまでだが…。どちらのサウンドも作るが、自分の好みで言えば、乾いている系の方が好きかもしれない。

ちよつと本題とは離れてしまった。個人的には「潤い」的なものとは縁遠い生活をしていると思う。まあ乾いたサウンドが好きでも、心は瑞々しくありたい。

転会おめでとつ!

経堂北教会に来るまで

菊地信行

この度、経堂北教会に転会いたしました。東京神学大学大学院1年の菊地信行と申します。転会にあたり、改めてご挨拶と自己紹介をさせていただきます。

主の導きによって経堂北教会の一員として加えていただけましたこと、大変嬉しく思います。私は東神大へ入学が決まった時、母教会である聖学院教会の牧師から、神学校生活の4年間で、母教会以外の2つの教会に奉仕し、勉強するよう勧められていました。入学して1年間は聖学院教会で、学部4年生の時は浅草教会、昨年は葦のかご教会の神学生として奉仕させていたのですが、諸事情により、経堂北教会へ転会させていただく運びとなりました。4月からは大学院2年になるため、順調に卒業が決まれば1年と

いう短い時間にはなりますが、どうぞよろしく願っています。

私の生まれは、父が牧師で、母がクリスト者のクリスチャンホームです。15歳のクリスマスに聖学院教会で受洗いたしました。大学では、英米文学でもマイナーな黒人文学を専攻し、英語教師になりたいと考えていたので、教員免許も取得しました。献身について考えるようになったのは、大学3年の時でした。お世話になっていた牧師が、進路を考えるクリスチャンの学生たちに、1度は真剣に献身を考えなさい、とおっしゃっていたからです。幼い頃から父や牧師を見てきて、自分には縁遠いものだと感じ、必死に遠ざけていた献身が、近くに迫ってくるような感覚でした。祈りの中で、自分が伝えたいのは英語を学ぶ楽しさよりも、神様の福音に根ざして生きる平安や喜びであることを知りました。教会に仕えることも大切ですが、今は学校に仕える牧師を志しております。

経堂北教会での生活を楽しみながら、勉学に打ち込んでまいりたいと思います。

追悼

聖歌隊と「へ音記号」とピアノ

故・岡田和貴兄

父は母が天に召された後、毎週教会に通い聖歌隊に入らせていただき、楽しい時を過ごしていたようです。私は驚いたり心配したりしていましたが、聖歌隊の皆様が温かい心で父を受け入れてくださったことに感謝しております。

父から「聖歌隊に入ったんだよ」と聞いた時は「ええっ」と驚きました。幼い頃扁桃腺を切除していたためか、お世辞にも美声とは言えず。ずいぶん昔、カラオケ用にマスターする、と「石狩挽歌」を練習していた時は、何度やっても半拍休みを忘れてしまい、なかなかマスター出来ませんでした。

そんな父に聖歌隊が務まるのだろうかと思っていた数ヶ月後。今度は「へ音記号（の楽譜が）読めないんだ」と言われて又びつくり。あんなにバイオリンをやっていた

のに。よく考えるとバイオリンの音域はト音記号の音域のみ。だから読めないのだと気づきました。

実家に行った時、父の聖歌隊の楽譜に私がドレミを記入したら「すごく助かるよ」と言ってピアノで1本指で弾いていました。しばらくすると今度は「ピアノを習う」と聞き、またびつくり。しかも「エリーゼのために」を弾きたいと。結構、難しい曲だけれども頑張るなど感心していました。その数ヶ月後に私が「エリーゼのために」を弾いたら父が次に弾き始めました。さすがに習っているだけあって想像よりずっと上手にできていました。

短い期間でしたが、聖歌隊に入ったことで次々と新しいことにチャレンジできた父の晩年は恵まれていました。きつと今頃天国で音が取れないと言いつつ、得意な方に教わっているのではないでしょう。いつか聖歌隊の活動が再開した頃「やっぱりみんな上手だな」と聞きにくるでしょう。その時は少々しわがれたDressが聞こえるかもしれません。（清水清佳）

説 教

『見えるのは誰?』

イザヤ書35章1節～10節
マルコによる福音書8章22節～26節

狩野進之佑

聖書はここで、主イエスによって目を癒やされた盲人を紹介しています。これは単に、主イエスの身体的な障害を取り除く奇蹟の力を讃えたというだけではありません。この盲人の目が開かれたと同時に、信仰の目もまた開かれたことを語っています。

身体が目が開かれるとき、同時に信仰の目が主イエスによって開かれたことを、マルコは細かな言葉遣いによって表現しています。この短い聖書箇所の中で「見る」という言葉が5回使われています。これは新共同訳聖書では同じ言葉で訳されていますが、ギリシア語では、実は4種類の異なる単語で表現されています。信仰と関わるのはまず24節の「すると、盲人は見えるようになって、言った」という言葉です。ここで「見える」と訳されている言葉は、直訳すれば「上を見る」という意味に

なります。ここで文字通り盲人が上を見たわけではないでしょう。

これは主イエスが祈るときにのしぐさを思い起こさせます(マルコ6・41)。主イエスが天を見上げて祈られたというのは、天上の神に目を向けて祈ったと考えて良いでしょう。同じように盲人も主イエスによって見えるようにされてすぐ「上を見」ました。それは主イエスと同じように、天上の神に目を向けたということです。盲人は神を見るように、神に目を注ぐようになったのです。

続く25節で「何でもはつきり見えるようになった」と訳される言葉もまた信仰に関わります。ここで「見える」と訳されている言葉は24節とは別の単語です。直訳すれば「中を見る」という意味になります。あるいは聖書の他の箇所では「見つめる」と訳されています(マルコ10・21)。主イエスが

人の心の中を見て、奥底まで見抜く、そういう時にも使われる言葉です。主イエスに目を開けられた盲人はそういう見方で、「何でもはつきり」見つめることができるようになります。ものごとの内奥を見る力、真理を見極める力と言いついても良いかと思います。盲人はそういう目を開かれたというのです。

神を見上げ、真理を見極めることができる。それはファリサイ派や弟子たちが、主イエスのことを誤解していたことは対照的なことです。信仰心の篤い宗教家であるファリサイ派にも、全てを捨てて主イエスに従うと決断して歩んできた弟子たちにもできなかったことを、この盲人はできるようになったのです。本当に神を見るのは誰なのか? 人間の信仰心や信仰的決断は麗しいものですが、それは神を見ることを可能にはしません。神様が信仰の目を開けてくださるから、人は神を見ることができのです。

主イエスは最後に、この目を開かれた人に対し、「この村に入っていない」と命じ、家に帰さ

れます。主イエスは奇蹟を起こしても、それを人々にことさら吹聴しようとなさいません。そういう主イエスの姿勢を表した言葉とも言えましょう。しかしまた、以前ゲラサ人の癒しについて読んだ時のことも思い起こします。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい」(マルコ5・19)。

これと同じことが目を開かれた盲人に求められているとも言えるのではないのでしょうか。8章26節の最後の言葉、「家に帰された」と訳されている言葉ですが、直訳すればこの言葉は「家に遣わされた」とも訳せます。そして実際、盲人は黙っていたわけではなくて、この癒やしの喜びを家族と、さらには教会の家族と分かち合ったに違いない。そうして伝えられてきたから、私たちもこの奇蹟を知っているのです。私たちもまた神に目を開けられた1人として、主イエスの派遣の言葉通り、神の真理を見つめることのできる、天の神を見上げることのできる、この喜びを分かち合っていきましょう。

伝道師の書き込み

年度末が近づいて、今年度の反省や次年度に向けての準備がなされる時期になりました。コロナ禍抜きには語れない一年となつてしまいました。自分が歴史的事件の只中に立たされているという感覚は、思えば初めてかもしれません。

10年前の東日本大震災や20年前の同時多発テロ事件など、自分が生きている短い人生の間にも歴史的事件と言えるようなものが起こ

っていたわけですが、申し訳ないことです。テレビの中だけの、なにか別世界の事柄のように見ていた部分もあったようにも思います。ただ、こうして歴史的事件のある種の当事者となつてみて思うのですが、仕方ないことだとも思います。SNSの発達でいろいろな人の意見に直に触れることが容易になりました。同じ事件の中に立たされているとは思えないほどに、色々な意見があることがよくわかります。中にはそれこそ、コロナ禍を別世界の事柄のように捉

えている人だっているのです。わたしも当事者の一人でありつつも、他の当事者と思いを一つにすることはできないものだと思つて分かれられます。一人でいることも、ずっと室内に籠ることも苦ではない私にとつて、そうでない人たちの思いは正直に言えばわかりませんし、罹患された方や医療従事者の方々の疲弊もわかるわけではありません。かといって、コロナウイルスなどそう恐れるほどのことではない、と思う人たちと同じ思いを抱くわけでもありません。

ん。結局のところ、同じ事件に遭つたからといって「隣人になる」ことなどできないのでしょうか。当事者かどうかではなく、やはり「行つて同じようにする」ことを通してしか歩みを揃えることはできないのかもしれない。

やがて終息に至るまで、教会としては礼拝を守りつつ歩むほか無気味とは思いますが。このような事態もまた神様の御手の内にあると信じつつ、来年度も御心を問ひながら歩んでいきたいと願います。

(狩野進之佑)

牧師の書斎から



3月から89歳の母が特別養護老人ホームに入所します。5年前ステージ4の胆管ガンで余命2、3ヶ月と医師から言われました。父は何とかしたいと考えたのですが、弟と相談して何もしないことにしました。その頃は動くことができましたが、2年ほど前から難しくなりました。1日3回ヘルパーのお世話になり、毎週訪問診療を受けました。ショート・ステイ

も利用しました。食事はほぼ給食でした。同居している弟夫妻が両親の面倒をみました。二人とも仕事がありましたから、大変だったことでしょう。

母が動けなくなったところ、弟は口腔ガンとの診断を受け手術しました。そんなこともあつて特養に申し込みました。

父は昨年末、頸椎の圧迫骨折で入院しました。今はリハビリ中です。コロナ禍で見舞うことはできません。すべて電話連絡です。

弟は3月で65歳の定年となり、

退職します。通院以外、暇になると言います。リハビリが中々進まない93歳の父のことで、また相談しなければなりません。もともと弟に任せつきりですが。

以前から両親には「葬儀は教会でするので、略歴を」と言っています。その前に受洗を願っていますが、言えずにいます。「余命2、3ヶ月」と医師に言われたときは、「天国に行きますから心配ありません」と言いました。「特別な人生観をお持ちですね」と少し驚かれました。

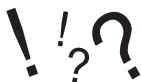
「天国行き」をより確実にするためには、受洗した方がよいと思つています。しかし、その時が近づくと、死亡宣告と受け取られるのではないかと心配になります。最後の時にならないと言ひ出せないのかと考えたりもします。

主任者となつて最初の受洗者は病床洗礼でした。聖霊降臨日、午後の就任式を終えてから病院に向かいました。最後こそ主にお任せするべきです。

祈りつつ、神の時を見極めたいと思います。

(岸 俊彦)

個人消息



掲示板



- 棕櫚の主日 3月28日(日)
- 受難週祈祷会
3月31日(水) 午前10:30 / 午後7:00
- 洗足木曜日 4月1日(木)
もより教会合同受難週礼拝 ※詳細は未定。
- 受難日祈祷会 4月2日(金) 午前10:30
- イースター墓前礼拝
4月4日(日) 午前7:30 春秋苑教会墓地
- イースター礼拝 4月4日(日) 午前10:15
※コロナ禍によって中止となる場合もあります。
週報などでその都度ご確認ください。

編集後記



▽この号が届く頃には「緊急事態宣言」が解除され、少しでも日常が戻っていますように(沢田)

「栄 光」2021 年 3 月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧 師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑
編 集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

長老のファイル



1年程前、在宅勤務を機に運動不足解消のためウォーキングを始めた。街を歩いているとあちこちで教会に出会います。立ち止まり、掲示板を見ると、通常通り礼拝を守っている教会がある一方、長期間礼拝を休止している教会、礼拝のライブ配信のみを行っている教会、出席者の年齢制限(65歳以上はご遠慮ください等)や人数制限

まで細かく決めている教会もありました。それぞれの教会で対応に苦慮されているのがわかります。

そんななか経堂北教会はでき得る限りの対策を実施、主日礼拝だけは1度も休むことなく今日まで続けられていること、そして感染者を1人も出していないことをあらためて神様に感謝します。

聖句を掲示している教会も多く、その聖句がコロナ禍には心に響くメッセージで、それをFacebookに投稿するとクリスチャンでない知人から「いいね!」が届き、う

れしく思ったこともありました。

2月の長老会では初のオンライン面接を行い、菊地信行神学生の転会を承認しました。教会学校で教師たちと共に活躍されるよう心から願っています。菊地神学生は2021年度に東神大大学院2年となり補教師試験を受験します。今後の神学生としての歩みも神様に守られ補教師(伝道師)となるのを祈って待ちましょう。

一方、狩野伝道師は2021年度に正教師試験を受験します。経堂北教会での最終年度、狩野伝道

師が十分に受験準備をされ正教師(牧師)となり、新たに招聘される教会へ送り出せるよう、共に祈りを合わせたいと思います。

礼拝のライブ配信は現状はまだ試行段階ですが、視聴者は着実に増えています。また要望があれば出席出来ない方のため葬儀や結婚式でもライブ配信を行っています。

未だ先行きが不透明な中で年度末を迎えますが、神様が必ず備えてくださると信じ、無事に2020年度を終えることができそうです。(尾藤美紗子)